

貧者のイエスと沖縄の思想
——キリスト教の民衆史によせて——

森 宣雄

あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである。あなたがたいま
飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りるようになるからである。あなたがたいま泣いて
いる人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。——ルカ福音書 6・20-21 (口語訳)

はじめに 彼の歩んだ道	1
1 子どもと貧者のための教会	2
2 地上の同胞をもとめて	4
3 沖縄の歴史と思想をまなぶことの意義	4
4 民衆のキリスト経験と民衆史——歴史の深部での交差	5
5 よわさのなかに輝くいのちの栄光	7
6 〈だからこそ〉の循環——組織と固定化を超える野生の論理	8
むすび 日本の民衆史研究と、キリスト教の民衆史	10

図 きょうのおはなしの登場人物(生没年)と要素の流れ

はじめに 彼の歩んだ道

わたしは聖書学・神学いづれも学校で専門的教育をうけたことがなく、ここ 100 年くらいの沖縄や台湾などの歴史について勉強して、いろいろな人の話を聞いて、文章を書いたり大学で教えたりしてきた者です。そんな人間がどうして教会の日曜礼拝でおはなしをするというのでしょうか。

ことしの春すぎからお知り合いになった菅澤邦明牧師さんから「しようよ」とお誘いをうけたとき、わたしもとても意外でした。ただ、じぶんにとってぜんぜん違和感がないのも本当です。制度的にどうなのかなと心配になりながら、じぶんとしては違和感がなくてことわる理由がないのです。

というのも、わたしの父は成人してからクリスチャンとなり、横浜でプロテスタント系の牧師をしていたため、わたしは教会で生まれ育ち、ものごころは聖書とともに育まれてきたようなのです。だから、大学で歴史の話をするのも、教会で聖書に関するおはなしをするのも、ひとつのころから出ていることで、そのころの持ち主からいえば、まったくおなじものだからです。

では、どんなおはなしをしましょうかと考えるに、いわゆるキリスト教の考え方をもちながら、その良いところや普遍的な(だれとでも分かち合える)性格を、いまの日本や世界のなかにどうつなげ、この時代の人類のひとり、日本社会の一員として生きていったらよいか——このようなことがらなら、幼いころからずっと考えつづけてきたことなので、みなさまにも「よかったらちょっとお耳を拝借」と言えるかなと思いました。また、この場所のあるじであるイエスさんも、どれどれ今日はお前の話でも聞いてみようかと、おもしろく耳をかたむけてくださることでしょう。

そんなしだいで、みなさまがた、お時間をお分けください。

とはいえ、じぶんのことをあれこれお話するのは気恥ずかしいですね。「自分はこういう人間です、こうして生きてきました」と得々としゃべるといのは、自慢しているような、また自分のことを人に押し売りしているようでもあり、妙な力も入ってしまいます。どうしましょう? ——すると 1 冊の本の姿がまざまざとよみがえってきました。

それは、ある法律学者のおじいさんが、じぶんの子どものころから青年時代までの歩みをふり返った本です。この人は戦争中、学問の自由と大学の自治をまもるため政府とぶつかって大学を辞め、戦後は大学の民主主義のシンボルのような存在になったのですが、本の題名は『彼の歩んだ道』（末川博、岩波新書、1965年）といいます。ずいぶん昔に読んだので中身は忘れてしまいましたが、ひとつのことだけを思い出したのです。このおじいさんは自分の歩みをふり返って書くとき、「彼はそのとき〇〇した……」と、三人称のだれかのこと、小さいころからじぶんがよく知っている親友のこのように記しました。すると、じつにリキミのない淡々とした調子で彼の歩んだ道が語られることになり、読んでいるぼくも、記されている彼の歩みを、友だちのこのように心配しながら読みすすめていくようになりました。

この彼は成長してからほとんどずっと京都に暮らしただけで、1977年、ぼくが10歳にならないうちに亡くなりました。だから会ったことも、写真で顔を見たこともありませんでした。

一方、ぼくのほうは20歳代の後半になって、10歳ほど年上のある人と知り合い、「一緒に沖縄の歴史の勉強をしようよ」ということで、その人が住む京都のほうに移り住むようになりました。早朝、一緒に車に乗せてもらい、おしゃべりしながら大阪の大学に通ったものです。その沖縄研究の兄貴分のような人と親しくなるうちに、ある日、意外なことが分かりました。その人のお母さんは、すでに若くして亡くなっておられたのですが、あの「彼」の娘さんでした。つまり知り合ったお兄さん——富山一郎さんといいます——は、「彼」のお孫さんだったわけで、なんとなく、めぐりめぐって「彼」と再会したような懐かしい気持ちになりました。

富山さんも学問の自由な話しあいの場づくりを、いまは京都の私立大学に移って探究しています。国立の帝国大学なんかには研究の自由や大学の自治など期待できないと京都大の総長になることを拒んだ、おじいさん譲りということなのでしょう。ともあれ、わたしが大学で自由に研究をしてもらってこられたのは、富山さん、そしてその背後にいるおじいさんの恩恵にあずかったもののようなのです。

ちょっと脱線したようで恐縮です。言いたかったことは——ぼくも今日は「彼」にならって、ずっと前からよく知る友だちのことを紹介するようなかたちで「彼の歩んだ道」をお話したいということです。頭では寄り道のように思えるものが本道になるのが、本当の人生なのかもしれません。

1 子どもと貧者のための教会

さて、彼です。まず幼少期、彼はものごころがついたときには教会のなかにいました。聖書の、とくにイエス・キリストの伝記である福音書と、アダムとイブのカップル、ノア方舟や十戒などが出てくる創世記を聞いたり読んだり、それに浸かりながら育ったので、しぜんと現代日本社会の文化や考え方には違和感をもつようになりました。この社会とどう付きあっていったらよいのか——小学生のころから、生き方、それからちゃんとした死のむかえ方も、ひとり考えるようになりました。いわば、乳幼児から日本人へと社会化するよりさきに、まずクリスチャンになっていたというわけです。

人の死というものも、聖書の物語では当然の通過点にすぎませんから、いつ天から声をかけられてもハイと返事できる心がまえだけはあったようです（母やおじいさんなど、まわりに医者が多かったことも、人の死をあっけからんと受け入れる素地に関係していたかもしれません）。

ですから、さらに現代日本社会におけるキリスト教界にも、おさない彼はなじみにくいものを感じていました。聖書に書かれていることを宗教として意識して、かまえて受けとめ呑みこもうとしている、といいたいでしょうか。彼の育った横浜の山手には、西洋から輸入してきたような壮麗な会堂があったり、牧師さんとかは古代のギリシャ語やヘブライ語を学んで聖書を勉強し、その流れで学究的な理屈づけを好んでいたり。でもそうした上っ面のことより、こころの深いところの感じ——あえて異教徒から入信したという自意識、自己本意性がつよく、あれはこう解釈すべき、こうしないといけないといった内面のしぼり、こわばりみたいなもの、それへの違和感のほうが大きかったようです。イエスさんは、子どもたちが素直に世界をうけいれて、自然の恵みを享受しながら公平さや正しさ、友愛をもとめるように、大人たちもそのような素朴な姿勢で創造主や世界に

むきあうようにしなさいという勧めを口にしたそうですが、そういう感じです（マルコ 9・35、10・15）。

我が目がひらかれたという回心も一大事ですが、それをあっさり人間の平常感覚に溶かしこむべきではないか。なにかそんな考えのことを、教会——つまり彼の家ですね、そこに日曜にやって来る大人のひとたちにしゃべって、「将来の牧師候補だね」などと言われ、きよんとしていた姿が思いかえされます。

しかしこうした違和感は、他の宗教や価値世界からの入信・受洗、回心を経験した人でも、キリスト教にふれる人の多くが感じたおぼえのあるものではないでしょうか。聖書を読んでそこに浸っているときには、その何千年前からの世界観のなかに入っていて、つまり創世記などを読んでいときには勘違いにせよユダヤ民族の一員になった気持ちになり、福音書を読むときにはイエスさんがもっとも近い者たちとした病者、いまでいう障がい者、罪びとだと烙印を押された人、貧乏人や子どもたちの一人になったつもりで、ユダヤ民族の範囲をこえてひらかれたその世界のなかに入って、読んでいないときの現代人のじぶんの感覚を「異邦人」のように感じるということです。

読書における感情移入、いやもっとつよい同化や変身の経験ですね。イエスはいま挙げたような、地上で虐げられているよわき者たちや、罪びとだと言われて苦しめられている世界中の人たちのために働いた救世主だと伝えられています（マルコ 2・17）。イエスとともにある、イエスの教えを受けいれるということは、かれが友とした病者や罪びと、貧乏人や子どもたちとともにあるということなのでしょう。イエスのことばは、そのような感情移入や変身へと、わたしたちを導きます。受けとめ方は人によって幅がありましようが、ここらあたりが、横浜の教会で育った「彼」にとってのイエスの教会でした。

ところが日本のキリスト教会は、貧乏人や子どもたちにはお高くも見えます。舶来の、ごく少数の信徒しかもたない新参の宗教ですから、まだ、しかたないところですね（あるいは数万人が犠牲になって「鎖国」を生み、日本の歴史を左右した江戸時代の最大の内戦、島原の乱の古傷のなごりでしょうか）。いずれにせよ、ズレときしみは当然教会の内外で起こります。このあつれきのなかからこそ、日本のキリスト信徒たちのなすべきなにかは形になってくるのかもしれない。

さて、「彼」の少年時代に移りますと、彼は学校でいい点をとったり成績を上げることは、地上の栄華や力をもとめて強者になろうとする行為で、これはいけないと思い、そのため小学校の高学年になっても「ひらがなすら書けない」と、一番上の兄などから笑われ、いじめられていました。彼は5人きょうだいの末っ子でした。本は読んで考えごとにふけてはいましたが、そういうことにこころ奪われていたのか、じぶんの体を洗うことにも気がまわらない、靴下もはけないような人でした。「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」といったイエスのことばを聞き知っていて、そして彼は末っ子でしたから、やさしいほうを当然のように選んでいました。

じつに単純素朴に、やさしい道をあゆんでいた彼のもとにも、中学校に入ると変化がおとずれます。児童養護施設からなかば強いらながら教会学校に出席してきていた中学の同級生たちと、日曜ごとに会うようになりました。小学生のときには面識がなく、その児童養護施設はたぶん隣の小学校区に立地していたのでしょう。平日に中学校で会っているかれらと、日曜日にもふたたび顔を合わせる。中学ではそろそろいわゆる不良グループと見られつつあったかれらにとって、両親のいる家に恵まれて教会にじぶんから参加し、ただ勉強も体育もまるでできない彼は、どんなふう映ったでしょう。

たがいのやりきれない気まずさのなかに、日本の教会がもつ二つの階級文化を今さらながら肌身で知りました。知識人や良家の子女のための立派なお行儀のよい教会と、その人びとから施しや憐れみを受ける者たちが反発し、あるいは、まれに激しくつかみとることもある教会といった二側面です。ほんとうは後者こそイエスにとっての教会に近いはずなんです。ともあれ、彼はその両方から落第していました。

また、ちょうど思春期で自我が目覚める年ごろでしたから、彼はほんとうに信仰があるのか内面をふかくのぞきこむようになり、文学・哲学・社会など、家の神学的な本棚からその外へと歩き出しました。さらには、父の教会がそれまでの単立教会（黒人奴隷の解放をめぐる南北戦争で男性が出兵するなか、1861年にアメリカ

で初めてできた女性による自立的な海外伝道団が 71 年に日本の拠点として設立した「混血児」養護ホーム・女学校の付属教会) から、幼児洗礼を認める長老派 (福音主義系) に宗派をさだめて他のいくつかの教会と組織化をはじめた時期であったことも重なり、じぶんが洗礼を受けるべきか考え、父のすすめをことわり、教会から離れ、家からも何度か出て、さまようようになりました。

2 地上の同胞をもとめて

教会で聖書とともに生きてきた彼にとって、これは大転換でした。ふつうの意味とは逆ですが、出家したような感覚です。彼は日本社会の文化や価値観にはまったくの「異邦人」で、学校の勉強や体育の競争などからもすべて降り、世俗的な価値観を受け入れることができませんでした。その彼の、こころの故郷である教会、そして家庭も捨てたということです。

中学 3 年の冬休み、大晦日の晩に信教の自由をめぐって父親と対決し家出をして、前年の家出旅行で訪れていた東北、宮城県の漁村へとむかおうとした途中、彼は繁華街を通りかかりました。元旦の未明深夜のことですが、そのとき、養護施設から教会学校にきていた同級生らのグループにばったり会いました。二、三のことばをかわして別れた場面が、不思議なほど鮮明に記憶に焼き付いて残ったそうです。

そして中学から高校にかけての葛藤をとおして、彼はおなじ日本の社会にくらす他のマイノリティの人びとの歴史や考え方をまなぶことで、そこから“同胞”を見いだそう——というかむしろ、考えて行動することで、なんらかの同胞性をつくり出したいと考えるようになっていったようです。家出などで友だちや学校に迷惑をかけたことは反省し、父親になんとか信教の自由を認めさせたあと、高校にかろうじて進学し、あたらしい故郷さがしを模索するようになったのです。

生まれ育った横浜山手の自宅の近所には、高台に高級住宅地があり、ぜいたくなくらしをしている人たちが歩いていて、坂をくだればホームレスの日雇い労働者のまち・寿町があり、クラスメートには中華系、朝鮮系、沖縄出身、あるいはカンボジア難民の子どもたちもいましたから、彼が隣りあう二つの世界の矛盾をなんとかしたいと思うのはごくせんな発想だったと思います。裕福な家の出の両親のもとに生まれたとはいえ、その家庭から出ていく道をこころにさだめていましたから、居場所はなく、おなじように内面的な疎外の境遇にあるマイノリティの人たちのことをもっと知りたい、まなびたいと思ったようです (とはいえ他面で社会的、階級的には相違があるのですが、その違いゆえにこそ、まなびたいと考えたのでしょう)。そこには、家庭内や社会的には流浪していても、イエスとともに歩きつづけている感覚は、こころのどこかにあったようです。

この意味で、彼はじぶんをある種のクリスチャンだと思ってきたようです。洗礼も受けておらず成人して教会に所属したこともいちどもありませんから、制度的には違うのですが、意識する以前の生まれつきのキリスト者だと。考えようによっては、イエスはいちどもみずからは洗礼をほどこしていませんし、イエスのことばにならば、それを小さいなり貧しいなりにひきつごうとする者にとって、教会の所属や洗礼は絶対に必要不可欠だというわけでもないのかもしれませんが。この考え方は、家の本棚に並んでいた内村鑑三や矢内原忠雄の全集にふくまれていた無教会主義の姿勢にも通じていたのでしょう。積極的に教会の存在を否定するわけでは、もちろんないのですが、教会の組織的な所属にはあまりとらわれない考えです。

彼が西宮で教会の礼拝に参加しているのは、幼少期いらいの懐かしいことで、喜んでいるようです。

3 沖縄の歴史と思想をまなぶことの意義

さて、日本や世界、つまり地上で、マイノリティとされる人たちのことをまなびたい、その“同胞”の苦境をもっと知り、なにかその苦しみをとりぞくようなことをして生きていきたいと思いつつ、大学を受験したら、たまたま座る席をあたえられました。そしてやがてしぼりこんでいった専門分野は、アメリカの黒人史・宗教社会学をへて、沖縄の近現代史、政治史や思想史となりました。

日本社会の側から沖縄のことをまなぶ意義があると思うのは、沖縄の人びとのあゆみをとおして、①地方や

女性や子どもたちなど、よわいところに負担をしわ寄せするかたちで発展してきた日本社会のこれまでのありようをよく知ることができ、また、②そうでなくよわい者を犠牲にしない社会への探究が沖縄ではこころみられており、③しかもその精神には日本社会の古い部分とも共通するところがあって、未来の可能性についても検討することができる——こういった点が大きいと思います。

「沖縄からは日本がよく見える」という言い方が、かつてよく口にされました。日本社会の真の姿を照らし出す鏡だということですが、気をつけるべきは、沖縄を、日本をよく知るための鏡などの道具にしてしまっただけとはいけません。沖縄にも日本にも、良いところ悪いところがあります。ひとつの社会にもいろいろな人がいます。ただ、日沖関係は差別的で非人道的なものとして続いてきましたので、おたがいにあって、たがいの関係を変えていくことは是非とも必要で、そのためにはまずお互いの関係のあゆみや、そもそもこれまでほとんど知られてこなかった沖縄の歴史や、そこで人びとが育んできた思想、考え方についてよく調べ、まなぶ必要があります。

いま、まっとうなかたちでの他者との関係のとり方を模索して、たがいに励まし合ったり学んだりしていけば、それは明日じぶんや子どもたちがまっとうな関係のなかで、まっとうに人としてあつかわれながら生きていく道につながっていくのでしょうか。そういう見通しのもと、国際政治や軍事外交問題にもじぶんの足で立つてむきあってきた沖縄の人たちのあゆみを知ることは、大きな励ましや展望を、それぞれ、とくに日本社会にくらす人たちにあたえてくれるように思います。

また、沖縄社会の側には、日本社会から加えられてくる差別や抑圧の巨悪に立ちむかうのに忙しくて、じぶんたちの内部の矛盾、とくに女性や離島出身者などにたいする差別や抑圧の是正にあまりとりくむことができずにきたという一面があるかと思いますが、この点については、沖縄にかかわろうとする日本人が、なにがしか、できるところがあるかもしれません。一方的に学んでばかりでなく、おぎない合う関係が人間には必要だからです。

沖縄社会にくらしてみると、ヤマトンチュー（日本人）はじつに少数で、やさしくいたわってもらっていただく反面、また社会の根幹部分に関しては、よそ者として徹底して排斥される呪われたマイノリティでもあります。ですがこうした矛盾においてこそ、多くのことを教わり反省する機会をあたえられてきたお返しを沖縄社会の側にいくらかでもなすことができるかもしれないということです。

あまり口にしにくいことですが、口ごもっているのは、なにを言っているのか分かりにくいかもしれませんから、もうすこし踏みこんで申しますと、日本と日本人というのっぺら坊の均質的な支配者集団にたいする恐れや憎しみを超えて、沖縄の社会と人びとが、みずからの変革とか解放にひらかれていくための一ステップとして、沖縄社会に他者として関わり、ときには邪魔だ余計だと叩かれもする日本人の存在は必要になるときもあるかも、ということです。このあたりのことは、ことし彼が書いた本『沖縄戦後民衆史』（岩波書店）の2つのコラム、「叩かれてつなげる達人——中野好夫」と「天皇制と沖縄——〈すぐれた対話者〉たりうるか？」に書いてあります。ご関心のあるかたはご参照ください。

4 民衆のキリスト経験と民衆史——歴史の深部での交差

そのことし出た本で、彼は長年の課題にとりくむことになりました。一言でいえば、よわい者、貧しい者、おとしめられ虐げられた者たちは、よわいまま貧しいままで、政治的な抑圧や個々人の逆境をはねかえして強者に打ち克つことはできるかというものです。そのようなことは可能か？ それを沖縄の戦後70年史をえがくなかで探究しました。

ここまでのお話をお聞きいただければ、もうお気づきでしょう。執筆当時の彼はあまり自覚していませんでしたが、イエスのことばの地上における現実態というか、響きあう現実の歴史のありようを沖縄の戦後民衆史のなかに探っていたといえます。教会の外に出てさがしにいった“同胞性”とは、よわく貧しい者が、そのよわさゆえにむすんでゆくなにかだったようです。そしてその探しものは、たしかに見つかりました（くわしく

はその本の序章 17 頁を見たり、あるいは、月 1 回金曜日の夜にここ西宮公会堂でおこなっている「沖縄戦後民衆史／特別講座」で、彼の話をお聞きいただければと思います。ちなみにその金曜夜の講座では、半分くらいは沖縄に関する歌をうたってみることで、沖縄の人の考え方をまなぶ、まねしてみるという内容だそうです。本はあまり好きじゃないなというかたも、お気軽にお立ち寄りください。

ところで、本を書く舞台裏のこういう問題意識について、彼はこれまで人さまにお話しすることはほぼひかえてきたようです。というのは、キリスト教の教義になぞらえて沖縄史をえがいたとか、沖縄史をある目的を実現するための手段や道具にしていると誤解をあたえることになると思ったからです。実際のところは、執筆のためにキリスト教関係の本を参照したというようなことはなく、むしろ思想的なバックボーンとしては中国の古典、老子・莊子・孟子や、それまでまったく無知だった日本の大衆小説がとても参考になったそうです。

遠因として、彼が無自覚のうちにイエスのことばに通じるなにかを探究していたから、学問的に沖縄戦後史の探究をふかめていくなかで、はからずもその下地が浮びあがってきた、ということはいえると思いますが、ではなぜこういう現象が起こったのか。あえていえば、イエスのことばにある、地上のよわい者のための救いという思想の普遍性と、それとは無関係に沖縄の民衆がみずからつちかかってきた思想の人類的な普遍性がしぜん響きあい、たくまざる交差が本のなかで起こったということなのでしょう。

(じつはこうなることを予想させる前兆は、前に出した本のときに、あらわれていました。その草稿を読んでいた方から、「これはあなたにとっての聖書だね」との感想をいただいていたからです [『地のなかの革命』現代企画室、2010 年、473 頁]。彼にとってはまったく予想外の衝撃的な感想でしたが、たしかにその本でえがいていたところは、厳密に実証的な沖縄戦後の民族史といったようなもので、いわれてみれば旧約聖書の歴史書のようなものでした。そしてその本の延長線上に、専門家むけでなく一般の読者の方がたにも読んでもらえるように、また問題意識もよりひろく普遍化させて書いたこんどの本は、イエスの伝記をしるした福音書の影響を受けているように思えます。)

イエスのことばと伝記を記した福音書と『沖縄戦後民衆史』という本の交差・影響関係という場合、そこには 2 つの側面があるかと思います。第 1 の側面では、すでになんとか触れてきたイエスの教え、よわく虐げられた者たちにとっての救いのことばに呼応する現実の歴史はありうるのか、模索しています。この教えは福音書のなかでもとくに最初に書かれたイエスの伝記であるマルコ福音書に伝えられています (そのあたりのことは、ここ西宮公会堂で長きにわたり連続講座をなされ、礼拝で説教もされたという田川建三さんの叢書『新約聖書 訳と註』[作品社、刊行中]にくわしく分析されています)。

マルコ・マタイ・ルカの 3 つの福音書は、一見すると同じようにイエス伝を記していますが、大きな相違もあります。十字架での刑死にいたるイエスの生涯とその教えを記すにあたって、最初のマルコには率直なおどろきや怒り、通常の人間の理解や想像の範囲をこえたイエスの力ある言動への畏怖が目立っています。常人の理解を超えて生きて死んだ人がいたという衝撃の波がまだざわついていきます。一方、マルコ福音書を参考にしながら書かれた後続のマタイ・ルカには、不可思議さをもったイエスの言動を、イエスは神の子だったのだ、だから人間に分からないのは当然なのだ、宗教的に権威化したり神秘化したりする傾向がみられます。

これらのおどろきや怒り、畏怖、あるいは権威や神秘へのかたむきには、著者たちの人間性・価値観が反映されているわけですが、しかしながら、子どもころからイエスのことばに触れてきた彼にとっては、あまり実感のわかないものでした。ごくしぜんな人間や世界における摂理・真理としてイエスの教えや言動をはなから受けいれてしまっているからなのでしょう。これはなにも彼にかぎったことでなく、イエスの言動に小さいころから触れてきた人たちに多かれ少なかれ共通する感覚——いや、きっとそればかりでもないはずです。キリスト教が世界中にひろまったのは、教会や宣教団のご苦勞もあるにせよ、なによりイエスのことば自体に、人間の本質や原点にうったえかけ、「そうだそうだ！」と賛同をよびおこす力があふれているからでしょう。そこには共感こそあれ、怒りや権威、神秘性などが入りこむ余地はあまりありません。ですがこういう素朴で、いわば“子どもっぽい”感懐は、理屈のことばになりにくく、それだけに理詰めの神学者さんの教説や、莊嚴

に居ならんだ神父さんたちの隊列などにはまるで太刀打ちもできず、沈黙のうちに“平信徒”の経験として置かれてきたのではないかと思います。

いわば民衆のキリスト経験といった次元があることを考えるのですが、その視点から見ると、神学や教会だけでなく、福音書をまとめた記述者たちの感覚にも、否応なくズレを覚えます。かれらは知識人、神学者、宣教師ですから当然でもありますね。いま世界の人口の3分の1がクリスチャンといわれますが、民衆にとっての聖書は、近年まで読むものでなく耳で聞くものだったそうで、民衆は福音書の記者たちの知識人らしい書き方を、たぶん文字どおり聞き流してきたのではないかと推測したりします。

ともあれ、そうしたことから、いま話題にしている福音書と『沖縄戦後民衆史』の交差の第2の側面に進みますと、福音書記者たちのおどろきや怒り、権威主義や神秘性を軸にしてものごとをとらえ、記すのではなく、**真理が地上で実現されていくことの困難さにひたすら耐えねばならない民衆の哀しみや苦しみ、そして、にもかかわらず真理が力をもち、堂々と人間のこころをとらえて社会の総体をつき動かしてゆくながい波** **動の揺るぎなさ——これらを軸として地上の人間たちの歴史をえがく**という、姿勢の違いが、彼の書く歴史、民衆史にはしぜんにあらわれていました。これは、福音書を読む恩恵をその記者たちからあたえられた後の世代としての、スタンスの発展的な変化、あるいは先祖がえりだと思われまます。生前のイエスのまわりにあつまっていたのは知識人よりも民衆たちですから、そのイエスの初代の支持者、友人たちである民衆への先祖がえりということです（これらのことは、福音書は神が聖霊をとおして書かせた絶対的な聖典だとする正統的キリスト教神学の立場からは不遜にあたるかも知れず、心苦しいのですが、書物としての聖書の成立・受容・伝播のあゆみを追う聖書学の議論としては、まあ容認していただけるでしょうか。その後者の視点から話を進めます）。

比喻としていえば、こんどの本はある意味、マルコ福音書にとってのその後日談的な位置にあるのかもしれませんが。もう一方のルカ福音書には、おなじ著者によるイエス死後の続編の物語として「使徒行伝」という弟子たちの言行録があつて、これも新約聖書に収められています。それになぞらえていえば、直弟子からローマ法王・カトリック教会へと進んでいくルカの系譜よりも、子どもたちや貧者とともにあるイエスのすがたをえがいたマルコ福音書の後続、その流れの周辺に、こんどの本は位置しているように思われるということです。

もっとも、いまマルコとルカの傾向や系譜の違いを際立たせて述べましたが、歴史や思想の流れはそんなに単純に切りわけられるものではありません。お話を組み立ててお伝えするための作業仮説と受けとめていただければ幸いです。じっさい、使徒行伝の後続としてあまたの聖者伝がカトリック教会や修道会で書かれてきましたが、なかでもほまれ高い聖人として中世イタリアの聖フランチェスコがいて、いまその理念をうけつぐ教皇フランシスコは、ローマ法王の座にあつて「貧しい人たちのための教会」という理念をかかげています（『教皇フランシスコ いくつしみの教会』栗栖徳雄訳、明石書店、2015年）。これは歴史的にもたいへん意味のあることのように思います。2000年前に貧者の友・イエスがパレスチナに出て、1200年ほどたって、イエスをまねて富をすて、貧者とともにあり、鳥とお話したフランチェスコさんがイタリアに出て、いま南米から、かれの名をもらった教皇フランシスコがあらわれているという、たいへん気の長い話です。

そしてカトリックから分かれたプロテスタントの流れをくむ、ここ西宮共同教会の菅澤牧師さんは、フランシスコさんのことばに希望を見いだしておられるようですね。宗教戦争の歴史を思うと、意味ぶかいことです。

5 よわさのなかに輝くいのちの栄光

すこし観念的な話をつづけました。民衆の歴史は、真理の実現の遅さに耐えるなかでも、人と世界のあるべき姿をもとめて（あるいは夢見て）励ましあい歌いあい進んでいる、それは底深いうねりのようなもので、表層で波打つ権力者の興亡史を追うふつうの「歴史」とは異なる、より深いところで人類史をかたちづくっている、そしてイエスも沖縄戦後史もその深部にあつて交差をとげているのではないかと、ということなんですが、それをもうすこし具体的に見ていきたいと思ひます。

こんどの『沖縄戦後民衆史』では、人間の歴史をえがく際のもっとも基底的な考え方、歴史にむきあう著者

の姿勢が、なんだかポロリと出てきます。特徴的なものとしては、「なま身のからだに耐えられない世界史的な歴史の重荷」、あるいは「なま身のからだに耐えられない政治の異常な重圧」といった言い方が出てきます(166・227頁)。この、なま身の人間のあゆみとして歴史をえがくというスタンスに関して述べてみます。

第二次大戦や東西冷戦の矛盾が、総ざらえふきだまつてのしかかっているような戦後沖縄の社会には、とうてい個人の人々の努力では処理しきれないような矛盾や抑圧が無数にひしめいていました。しかし沖縄戦で全滅の戦闘を強いられ、戦後も無期限軍事占領下の非人道的な処遇で置き去りにされた沖縄の人びとは、すぐには無理でも、あきらめずにねばり強く、代をついで差別抑圧を一步步つ克服してきました。

〈代をついで〉というとりくみは、なかなかできることではありません。近代以降、政治や軍事などの大きな問題は、政党や組合などの結社がとりくむのがふつうですが、こうした近代的な組織はなんらかの実現可能とおもわれる目的のために人間が結集する任意的団体で、ながい歴史的な差別や世界的な矛盾の集積に根底的な変革を迫って、長期にわたりたたかいつづけるのには相当の無理が生じます。結社に参加する個人にとっても、肉体的にも精神的にもかぎりある、なま身のからだど人生がこわれてしまいます。そうとなればそこは選手交代、トップランナーは後ろにまわって静養し周囲が保護するとか、あるいはみなで好機をねばり強く待って、としたほうがよいのでしょう。これが〈代をついで〉というやり方ですね。しかしそのためには、出しぬかれやしないか、裏切られはしないかといった疑心をはらう、たがいの信頼関係が必要です。それは家族や民族などの長期的な共同体のこころのきずなによって、かろうじて成立するようなものです。

そこでは目的を実現させようとする情熱や激しさ、かしこさよりも、挫折に耐え、苦境を忍びあう情けや、よわくばらばらにされてしまうからこそおたがいをゆるしあい、励ましつながらあう愛情、そして真理の実現や到来を信じて待ちつづけることのできる、しっかりとした世界観などが重要な支えとなってきます。戦後沖縄の民衆はまさにこのような思想を自前で生みだしつづけてきました(31・66・124・171・220・231頁)。

人間はよわく、はかなく、いがみあってしまう——**だからこそ**、つながりあわなければ生きてゆけない。むしろ、苦難のなかにあつて人からあたえられる愛や情け、自然からの恵みは、ひとつでは息絶えていくしかないいのちがつながりあい、よみがえりをとげる至上の歓喜を個人にもたらしてくれる。ならば、このながいとりくみに挑みつづけ、後世の社会や子や孫たちに真理の到来を近づけてあげられることを喜びとして、またあたえられたいのちへのお返しとして、信念をかたくして生きついでいくことこそ、人間にとって至上の誇りある生きかた、栄光なのではないか。戦後沖縄の社会は、このような思想を固有の祖先神や自然神の信仰を復興させるなかでかたちづくり、伝えひろめてきたと思います。こんどの本は、この思想が〈代をついで〉次々とあらわれてくる情景をえがき出すことに、焦点があてられています。

ひとのよわさやいのちのはかなさにつきまとう苦難と、それをくぐりぬけてやってくる歓喜——そこでは〈いのち〉がみずから語り、被造物である人間の肉体性や社会的属性などをこえて、わたしたちに語りかけてくる「いのちのことば」が内に外に響いているともいえます(ヨハネの手紙Ⅰ 1・1。ミシェル・アンリ『キリストの言葉——いのちの現象学』武藤剛史訳、白水社、2012年、113頁)。このいのちの声は、沖縄流に言えば、親や祖先から伝えられ、友や同胞、人類にわかち合われ、民族それぞれのしかたで自然の雄大さや創造主のもとに帰せられてゆく栄光というべきかもしれません(前掲『沖縄戦後民衆史』のコラム「子どもたちへの愛の思想——仲宗根政善」参照)。

大きな苦難をなめた人びと、民族からは、その苦難を乗り越える力と輝きにみちた思想が生みだされ、人類をあまねく鼓舞する栄誉で報いられるということが、歴史においてはなんども起こっています。ユダヤ民族の苦難の歴史を突きぬけてあらわれたイエスの教えと、世界史的な重圧から勃興した戦後沖縄の民衆思想に、通じあい響きあうものがあるのも、思想的には不思議とはいえません。

6 〈だからこそ〉の循環——組織と固定化を超える野生の論理

つづいて、いま述べたところを、この教会という場所や、さきの福音書との関係にひきよせて、今日のおは

なしの内容上のまとめをしたいと思います。

教会もまた、さきにのべた長期的な共同体のひとつです。カトリックやプロテスタントなどの宗派の違いはあらわれても、2000年つづいてきたイエス・キリストの信徒の共同体です。その信徒の第一世代である、いわゆる「十二使徒」、イエスの12人の直弟子たちは、教えをうけて救われた経験を個々人ではもちながらも、周囲との関係で自己利益や地上の権威にとらわれ、だれが一番か言い争い、しばしばイエスに叱りつけられています。そしてついには、そのなかの一人によってイエスは売り渡され、のこりの使徒も全員が逃げ去ってしまいます。使徒たちはイエスの教えを裏切るさだめにあって地上のあゆみをはじめた——これは聖書的にいえばアダムとイブいらいの人間の本質的な伝統かもしれませんね。ただし、このとき女性の信徒たちは刑死するイエスに最後まで寄りそったそうです。よわさやいつくしみの近くにある女性を差別する男たちのこころと組織のよわさも、新約聖書にはあらわれ出ているようです。

ともあれ、このイエス以後のあゆみのなかで、さきにも触れたように、マルコは、イエスを死にいたらしめた使徒たちのねたみや虚栄心などの罪業をきわめてリアルにえがき、また、地上の栄誉をあらそう弟子たちのようではなく、子どもたちや差別された人びとのように素直に創造主の神の愛を受けいれるべきだというイエスの教えを際立たせてわたしたちに伝えてくれます。これにたいし、つづくマタイ・ルカの福音書ではイエスの権威化や神秘化の傾向が比較的に色濃くみられるわけですが、それは直弟子たちに通じる、いかにもの“らしさ”が表現されているともいえそうです。ですが**だからこそ**です。マルコがいい、一番だということか？ それでは弟子たちと同じです。

わたしたちはよわくはかなく寄る辺がないからこそ、見かけの権威や神秘性などにすがりがちで、あやまちをおかします。**だからこそ**、よわくまがえる者として、聞こえは悪いかもかもしれませんが、わらをもすがるように素直に率直に、イエスが語った真理にむかう道が、前途に輝いてくるのかもしれません。

マルコだけでなく他の福音書もふくめてイエスの伝記には、総体として、人間が傲慢さや自己本意性、よわさを直視して、謙虚に神・創造主があたえてくれた恩恵を享受し、真理の実現・救済の到来にむけて力づくよくあゆんでいくべき道すじ、そのぐるっと一回転する循環の運動性がえがかれていると見ることもできる気がします。イエスが伝えるのは、その教説の正しさだけではありません。正しさや厳しさもありますが、みずからの孤独や苦しみ、あわれみやよわさへの寄りそい、苦難からのよみがえりもそうです。イエスは人の子としては小さなよわい心の持ち主でもあります。**そのところに、わたしたちは寄りそうことができます。**弟子たちのようではなく。不遜にも——しかしその力、たましいは創造主からあたえられており、イエスに触れるなかで啓発されるからです。これは神学的に言えば、三位一体ということなのでしょう。

正しさだけでなく、よわさもあやまちも、権威や神秘性へのかたむきも、ヨハネ福音書にみられるような哲学性や文学性も、わたしたちが希望やつながり合いに立ちかえることのできる、いくつもの導きの糸としてある。そのような人間の歴史の見方、民衆史における寛容さや柔和さの精神を、横浜に生まれた「彼」は、知識人が書いた福音書を知識人として読み、分析研究することによってではなく、教会を出て家ですて、戦後沖縄の思想史へと旅するなかで、つよく教えられました。

これはどういうことなのでしょう。ひとつには、貧者やよわき者とともにあつた原初的なイエス像は、イエスの死後、ローマ帝国や欧米の正統的な宗教となったキリスト教の歴史では、やや傍流的な位置に回ったかもしれませんが、沖縄にとどまらず民衆の歴史や思想史のなかには、その原点に立ちかえることのできる契機がいつでも生きいきと見いだせるということなのかもしれません。

もうひとつは、沖縄の思想の特徴でもある循環の論理、つまり世代や季節、正邪もが循環し、うつろいゆくことが地上の真理だという自然思想を、地上で組織をつくる人たちも受けいれるべきだという教えが示唆されているように思います。この循環の論理は、帝国や教団などの垂直的で前進的な組織の世界観にはなじみにくいものですが、組織の論理はこの野生の自然の論理をくつがえすことはできません。組織にまさる論理だということです。

究極的な唯一絶対の真理といったようなものがどこか（福音書のなかもふくめ）にあったとしても、人間がそれをつかんで計画的に社会に組み入れ、絶対的な存在になりおおせて生きていくことは、たぶん不可能でしょう。その根本的な理由は、人間は有限であり、みずから自己や自然を生みだした存在ではない、被造物だからです（人間の考えが立派だといったところで、その大事な考えを生む自分の脳を自分でよく見て、どう動いているのか調べてみることもできないのが人間です。しょせんその程度です）。してみると、真理は個々人の知性や倫理、意思や愛などによって掌握し、安定的にわが物に固定化できるものではなく、流れや関係性のなかにおとずれてくるもの、あたえられるものであって、逆説的な意味をふくむ〈だからこそ〉という直感的、霊的なかたちでつかみとられるものなのかもしれません。そのような謙虚な考え方は、絶対的な真理をもとめて定式化しようとする組織的な宗教の論理には、なじみにくいかもかもしれません。しかしイエスの原初的で民衆的なことばには、それはあまり対立することはないように思うのですが、どうでしょうか。

むすび 日本の民衆史研究と、キリスト教の民衆史

以上で「彼」の話は終わりですが、もうすこし、おまけの話をさせてもらって終わりにしたいと思います。（まずふり返りますと、約 2000 年まえ、ローマ帝国に支配されていたユダヤの、さらに辺境のナザレ地方に、イエスというよくある名まえの、しかし変わった大工さんがいて、ものごとのなりたちや真理を素朴に根本から見つめなおすことばや行動をあらわし、苦しめられていた民衆の心身を救い、たいへん多くの民衆の熱狂的な支持をあつめたこと、そして逆にそれが社会的には危険視され、ねたまれ、殺されてしまったこと——これは歴史的にもほぼまちがいない事実のようです。かれは貧しく苦しんでいる人たちを祝福し励まし、創造主があたえた自然や、子どものような素朴な考えを神の恵みとして享受すること、そしてこころのなかの「いのちのことば」、神の王国を感じ取り、謙虚に、また助け合って生きぬいてゆくことを勧めました。このような素朴な教えが響くのは、まずもって民衆たちで、民衆がイエスのことばに接してよみがえったように歓喜するのを見て、知識人たちも難しい理屈や権威などばかり追っていた目がひらかれ、考えを組み立て直すようになって、イエスのことばや伝記を書きしるし、そしてそれがいまに伝わっているようです。そこからローマ帝国の公認宗教となり、地のはてまで教会がひろまっていく組織化の道もはじまるのですが、それでもやはり——）

イエスは貧者や民衆の友、貧者・民衆そのものですから、沖縄の思想に響きあうのも不思議ではないのです。もちろん日本の民衆の思想にもそれは響きあいます。

別所梅之助という人がいます。明治のはじめから第二次世界大戦のころまで生き、西洋伝来の賛美歌に日本語の歌詞をつけ、編集にあたったことで、いまでもそのことばが教会などで生かされている人です。たまたま、先週の礼拝でもかれの作詞になる 301 番「山辺に向かいてわれ」が歌われましたね。

かれの考えは、「しかと地に立つものは、自づから天をも仰ぎ、同胞をもかへりみる」という言葉に要約されているように思います（別所梅之助『地に跡を印した人々』警醒社、1921 年）。しっかりと地上に生きる民衆は、おのずと世界をつくった創造主・神を敬慕し、まわりの人たち、同胞を思いやるといった意味です。

幼くして父を亡くし、父がまわりに遺した恩顧関係や情けがしだいに踏みにじられていく母子家庭で育ったかれは、さびしがり屋で山に登り、短歌をうたい、寺社をめぐりキリスト教にたどりつき、それを支えに、父に通じる無言の同胞を日本各地の歴史のなかに求めていきました。イエスが「己のなやみの中に、民衆のなやみの中に、神を観た」、そのさびしさと確信にはげましを得て、かれにならって民衆の歴史にたずねていったのです（別所『運命以外の一路』警醒社、1924 年、230 頁）。そのため、親しかった内村鑑三は、かれのことを「基督教会に在ると雖も、旧い日本人の魂を失はざる」貴重な人と評しました（別所『武蔵野の一角にたちて』警醒社、1915 年）。また別の本には、「今日の日本国民を作り上げた最も大いなる力の一つとして」「曾て身の力を傾けて同胞の為に働いた人たちの事業」を別所が数多く掘りおこしたことを称賛する、柳田国男（民俗学の創始者）の序文が寄せられています（『地を拓く』警醒社、1942 年）。

わたしが別所さんのことを知ったのは 5 年くらい前のことでした。ぼくには一人だけ、学生時代から本を読

みつづけて民衆史をずっと教わってきたお師匠さんがいます。そのご本人は「先生などと呼ばないでください、肥やしになるだけです」という謙虚な方なのですが、その人にもやはりお師匠さんがいます。西岡虎之助という、日本における民衆史研究の創始者です。ぼくからみれば民衆史のおじいさんのような存在ですが、この虎之助おじいさんが、民衆史という新しい歴史学のありかたを「啓発」され、はっきりと確信するようになったきっかけが、別所梅之助の本にあったそうなのです。

ぼくのお師匠さん、鹿野政直という人が学生時代に雑務をお手伝いして出た、西岡虎之助先生の『歴史と現在』（修道社、1956年）という本を読むと、こんなことが記されていました。「別所さんのものには、民衆とくに地方の人々の労苦が、温かさをもって取りあげられ、それがいかに日本の歴史の形成に役立っているかを、暗示している。わたくしは、こうした別所さんの行き方に、接することの遅かったことを悔いた」（206頁）。

西岡おじいさん先生は、別所さんの死後、戦後になって日本の歴史学の再生をリードするひとりとなります。かれの主張をまとめると、一方では民衆の生活の歴史的なうつり変わりを整理しながら、「身の力を傾けて同胞の為に働いた」「民衆とくに地方の人々の労苦」に焦点をあて、「今日の日本国民を作り上げた最も大なる力」を鮮明にすることで、民衆の「だれにでもわかり、だれにでもなっとくされる日本歴史」、したがってまた「世界＝諸外国の知識人の誰にも納得のゆく」、そういう「祖国をもちつつも世界性を失わない日本の歴史」、「世界史的立場をとる」「日本の歴史の、ほんとうの姿」を書きあらわすことが切に必要で、それがかれの目指した「民衆史」だということです（『歴史と現在』105—113頁）。

民衆史とは日本史の真面目であり、世界史である——なんと力づよいメッセージでしょう。日本と世界各国の歴史は民衆史において、臍帯のザイルのようなものでかたく結ばれている。各国の民衆史は三つ子、五つ子のように血が通いあっている。この確信の背後にながったのか、よく西岡おじいさん先生のことをまなばないといけないのですが、『歴史と現在』というご本を見るかぎりでは、別所さんの本が大なるインスピレーションをあたえたようです。つまり日本における民衆史という学問の出発点には、イエスの民衆性を媒介として日本と世界の民衆をつないだ別所梅之助の仕事がかかわっていたということです。

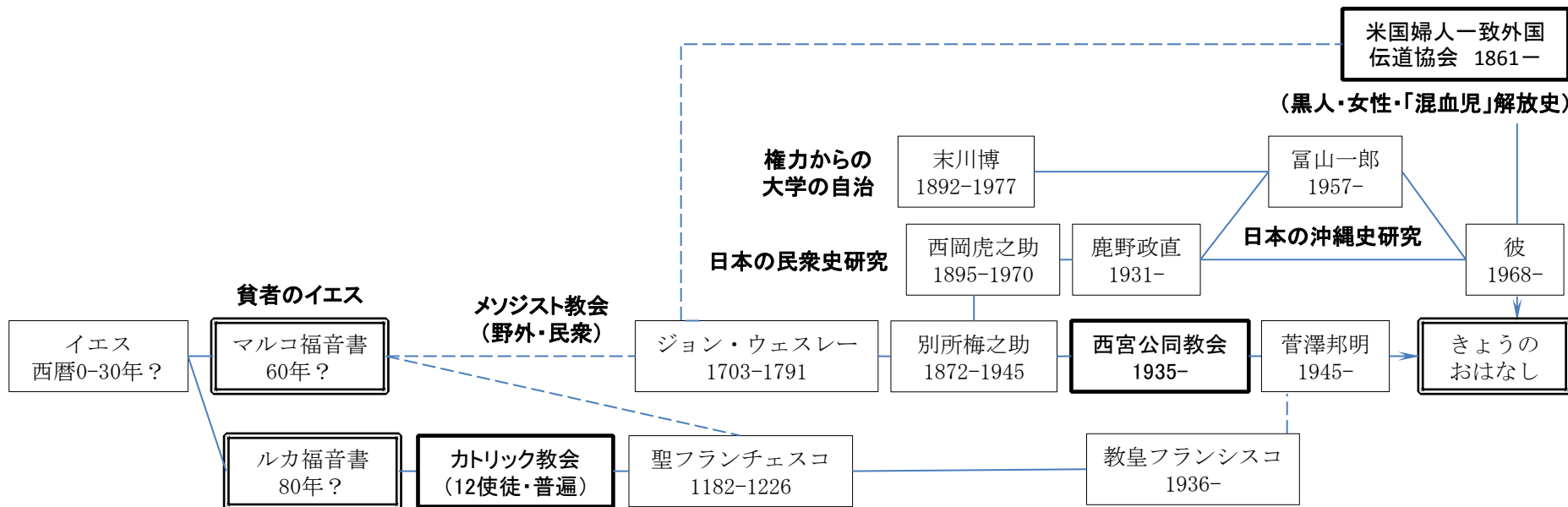
教会を出てよわい者の同胞性をさがしにいった人の書いた歴史書が、「世界史的立場をとる」民衆史となり、民衆史の原点にかえってくるというのも不思議ではなかったようですね。

おもしろいものです。そのおもしろさは、いま・この場につながっています。別所の梅さんがキリスト教の諸派のなかで入っていったのはメソジスト教会というもので、このグループは王様や貴族たちの近くにあったイギリス国教会から、300年くらいまえ、野に出て伝道集会をひらき、産業革命に直面して疲弊していた民衆のくらしのなかにイエスの教えをとけこませるやり方へと出ていった人たちです。ジョン・ウェスレーという情熱的な知識人が中心となり、かれらは社会奉仕活動をひろめようと、牧師ではない一般の信徒が説教者になる数多くの野外集会をあちこちでひらいて国教会から怒られ、やがて独立したグループをつくるようになったとのことです。当時イギリスの植民地であったアメリカやカナダにもひろまり、そこから明治時代に日本に渡ってきて、1935年にできたのが、ここ西宮公会堂だそうですね。わたしのような牧師の資格もない学者っぽい人間が礼拝の説教の時間をいただいておはなしするのも、こうした流れのなかにおきたことなのでしょう。

いま西宮公会堂は「子ども・お年寄り・身体の不自由な方を最も近い存在」として「人と神、人と人をつなぐ難しい働きをします」をモットーにして、幼稚園の子どもたち、阪神淡路大震災からの復興にとりくむ地元のみなさん、障がい者のみなさんのつどい、篠山の農村のみなさん、とおく沖縄の人たち、福島の小中学校・原発労働者のみなさんとながらあうことで、イエスのことばを地上にあらしめようとしています。そのとりくみには、きっとアメリカやイギリス、イエスの時代のパレスチナへとつながる民衆史的な世界のひろがりがあるのでしょうね。いずれ機会があれば、またこういうことについてよく調べて、たのしい話題を提供できればと思います。今日はそれにむけての、キリスト教の民衆史のはじめの一步でした。

理屈っぽい歴史の見取り図のような話が多くて、大変でしたでしょう。ながきご清聴を、ありがとうございました。

きょうのおはなしの
登場人物（生没年）と要素の流れ



*点線は間接的な継承関係（直接的対面関係の歴史的蓄積を必ずしも介さない）

*太枠は組織、二重線の枠は本・おはなし、ほかは人間。太字は要素。

*おはなしに出てきたもの見取り図であって、関係する歴史のすべてを説明するものではありません。